

低塩分水は厳寒期に容易に冷却されて結氷点に達するので、第2節に述べたように流氷野の内外で盛んに新成氷が出来るのである。しかし、この低塩分水の南流ベルトの外では、躍層が発達していないので表層が冷されると垂直混合が起ってなかなか結氷点に達しない。第2図に見るように、網走湾沖一帯が氷の無い海面となっていることの多いのはこの為である。またオホーツク海南半分の一般的傾向として海水は中央部および南東部では殆んど見られなくて、専ら西部の樺太東岸沖から北海道沖で見られるのも、この低塩分水層の偏在の為であろう。

5. あとがき

オホーツク海北海道沖に於ける流氷の到来状況を、初冬に於ける海況の変動と結びつけて概観して来た。これは流氷の初期より盛期までの姿であって、末期に流氷の退去する状況は上述のところと少しく様相を異にするが、その記述は別の機会に譲る。

終りに、1957年以來の航空機による海水観測に協力された航空隊の方々、いろいろな部門でこの観測に御援助下さったの方々、並びに観測飛行に参加された各観測員に敬意と謝意を表すると共に、やっと緒をついたばかりのこの海水観測・調査が今後も継続されることを祈って止まない。なお、終始御鞭撻激励を頂いた安井函館海洋気象台長に深く謝意を表します。

引用文献

- 1) 第一管区海上保安本部；海洋概報，昭和31年第4号。
- 2) 同，昭和32年第3号。
- 3) 同，昭和33年第2号。
- 4) 同，昭和33年第3号。
- 5) 同，昭和33年第5号。
- 6) 第一管区海上保安本部発表，1958年1月。
- 7) 函館海洋気象台海洋時報，第1号（昭和19年）

- 8) 函館清洋気象台；海洋速報，No. 65（昭和33年）
- 9) 函館海洋気象台海上気象報告，第2巻 第2号（昭和33年），および函館海洋気象台，札幌管区気象台；海水観測報告（昭和33年1月～4月）
- 10) 福富孝治，1947；オホーツク海中央部における結氷の生成についての理論的考察，低温科学，**3**，143～169。
- 11) 福富孝治，楠宏，田畑忠治，1947；海水の厚さの増加について，低温科学，**3**，171～185。
- 12) 福富孝治，1952；オホーツク海特に南南部海域における流氷の風による移動，低温科学，**9**，137。
- 13) 例えば日高孝次著「海流」，須田皖次著「海洋の科学」。
- 14) 梶浦欣二郎，1949；オホーツク海の夏季海況について，日本海洋学会誌，**5**，19～27。
- 15) 食品昭二，1954；オホーツク海の海水，水路要報，第40号。
- 16) 松平康男，安井善一，1935；宗谷海峡，亜庭湾表面観測，海洋時報，**7**，497～509。
- 17) 佐々木徳治，1957；オホーツク海北海道沿岸の初期流氷について，気象庁研究時報，**9**，114。
- 18) 沢田昭夫，1957；オホーツク海南部海域の大流氷野，測候時報，**24**，20～25。
- 19) 沢田昭夫，1958；南部オホーツク海の融氷期における氷縁移動について（1956），気象庁イ報，**40**，117～124。
- 20) 杉浦次郎，1958；オホーツク海南西部の海況について，気象庁イ報，**10**，549～553。
- 21) 田畑忠治，1952；千島列島南沖及びオホーツク海南部の海況について，低温科学，**9**，159。
- 22) 田口竜雄，1933；ベーリング海，オホーツク海，日本海北部の海水について，海洋時報，**4**，489。
- 23) 渡辺貫太郎，中山一蔵，1958；傾斜写真測量結果と1957年1月～4月の海水状況，気象庁イ報，**40**，49～77。
- 24) 渡辺貫太郎，1959；南下漂流する流氷の氷厚増加に関する考察。（未印刷）

〔雲鏡〕 研究発表要旨？

『学会に発表する研究は、発表の申込をする時に、出来上っていますか？』こんなアンケートを気象学会の会員諸氏に配布し、正直な答をもとめたら、どうなるだろうか。学会の研究発表要旨をみる度に、そんな皮肉を云ってみたい。それほど、「要旨」の内容は、「要旨」から遠いではあるまいか。要旨であるからには、結論を記してある筈なのに、序論に終わっているものが多い。ひどいになると、要旨とは違った研究発表があったり、発表者が出席しているのに、発表取消が行われたりする。これでは、全く、研究発表の要旨ではなく、新聞

記者の「予定稿」に近い。

この様な傾向の原因を、研究要旨申込の紙面の不足に帰する人もあるだろう。それならば、有料にはなるが、写真印刷を採用して、紙面を拡大し、図、写真までを収める方法をとるべきである。しかし、それにしても、発表申込までに、研究が出来上っていないと、要旨が充実するとは思われない。聞く所によると、物理学会の研究発表にも、これと同じ傾向があり、学界の長老から、お叱りがあったそうである。気象学会には研究発表の数だけが、むやみに増えるのを喜ぶよりも、発表そのものが軽視されている傾向をたしなめる長老が、おられないのは、淋しいことと云わねばなるまい。（K₂）